みぢかな（生活圏）文化活動施設のあり方について

株式会社　地域デザイン研究所
研究員　山　根　義　章

はじめに

物質的な豊かさの追及に対する反省や、余暇時間の増大、高齢化社会における生きがいの追及などを社会的背景として、「文化」に対する期待が高まっているが、特に最近では、単に鑑賞するだけでなく、「自ら参加し、創りだす文化活動」への欲求が強まっている。このニーズに対応するためには、日常生活から自由に文化活動が営める舞台「みぢかな文化活動施設」（＝生活圏文化活動施設・・以後こう呼ぶこととする）が整備される必要がある。

本報告は、以上の問題意識のもとに、弊社が平成２年度に鳥取21企画センターより委託を受け、鳥取県内の文化活動施設や文化活動団体の現状や問題点を調査し、みぢかな文化活動施設のあり方を検討した「生活圏文化活動施設調査研究」の要論である。

１．調査の対象と方法

本調査の対象を、生活圏文化活動施設ということで、「鳥取県内の徒歩圏・市町村圏までの文化活動施設」とし、その調査方法と手順を以下のようにした。

図1．調査の内容と流れ

①鳥取県内の生活圏文化活動施設とその利活用の現況および問題点の把握
- 文化活動団体へのアンケート調査
- 文化施設へのアンケート調査
- 文化活動実践者と文化施設管理者との討論会形式によるヒアリング調査

↓

②全国的な文化活動や文化活動施設に関する動向の把握
- 文化活動に関する統計データ等の調査
- 文献や新聞記事等による事例収集と動向調査

↓

③鳥取県における生活圏文化活動施設のあり方についての検討と提案
- 既存文化活動施設の利活用増進への提案（ソフト面、ハード面）
- モデル的な文化活動施設の提案（ソフト面、ハード面）
  ー「徒歩圏における施設」と「市町村で中心となる施設」ー

2．鳥取県内の生活圏文化活動施設とその利活用の現況および問題点の把握

生活圏における文化活動施設のあり方について検討を行うためには、施設の利用者側である文化団体の活動状況や施設に対する要望と、施設の整備状況や利活用状況とを調査し、両者のギャップから、現状の抱える問題点を把握する必要がある。

このため、鳥取県企画部文化国際課が実施した「文化活動活性化に向けてのアンケート調査」（文化活動団体へのアンケート調査）及び「文化活動施設利用状況等調査」（文化施設へのアンケート調査）により、それぞれ文化団体の要望や問題点、施設の利活用状況等を把握することとした。

また、この２つの調査を補完する意味で、施設管理者と文化活動実践者の両者からヒアリング調査を行い、より具体的な問題点等を把握することとした。

(1) アンケート調査とヒアリング調査の実施概要

①文化活動団体へのアンケート調査

- 調査対象団体……鳥取県内の文化活動団体662団体
- 調査実施時期……平成２年12月
- 回収数（率）……256部（40.0%）

②文化施設へのアンケート調査

- 調査対象団体……鳥取県内の公立、民間を問わず、広く一般に利用されている施設
- 調査実施時期……平成３年１月
- 回収数……148部

③ヒアリング調査

- 実施方法……施設管理者の代表と文化活動実践者との座談会形式
  鳥取県下３か所（東部地区、中部地区、西部地区）
- 調査実施時期……平成３年３月13日～３月15日
- 出席者……施設管理者、文化活動実践者とも施設の種類、文化活動の分野、地域等になるべく偏りが無いように選考（各地区６～９名）

ヒアリング調査出席者

	東部地区（３／13）	中部地区（３／14）	西部地区（３／15）
施設管理サイド	国府町中央公民館 智頭町総合センター 佐治村婦人の家	倉吉博物館 東伯町農協カウベルホール 吉田文具店BYホール	米子市美術館 淀江町中央公民館 山陰放送スタジオ
活動者サイド	鳥取市内絵画団体 智頭町内音楽同好会 気高町内陶芸同好会	倉吉市内邦楽同好会 倉吉市内彫刻団体 倉吉市内バレエ団体	米子市内写真クラブ 西伯町内歌舞伎保存会 米子市内ガラス工芸会

(2) 鳥取県内の文化施設の利活用の現状と問題点

以上の調査より明らかになった鳥取県内の文化施設の利活用の現状と問題点を要約すると以下のような点が挙げられる。

鳥取県内の文化施設の利活用の現状と問題点

ハード面	○専門設備、練習施設等の不足……「多目的施設」と称される施設が多く（94%）、多様化する文化活動や日々の練習に供されるという点に対して、施設や設備が対応しきれていない→民間施設や個人宅へ依存するケースも ○駐車場の不足
ソフト面	○施設の運営時間と利用者の利用時間との問題・・・文化活動は「夜」や「日曜日」等の特定時間に集中する傾向が強いが、その時間に施設の非運営時間が多い ○施設の利用料金と活動者側（活動団体等）の資金不足の問題 ○施設側、活動者側とも人材不足、イベント不足・・・施設側に事務員や管理員はいるが企画員等が不足しているし、活動者側にもリーダーたる人材が不足しており、積極性や協力関係が稀薄 ○情報の不足、ネットワークの不備・・・文化活動の刺激や展開に支障
総合面	○施設の利用率が低い（各施設とも40%以下の利用率が多い）・・・一方では「足りない」の声も→上記の「利用時間」や「専用施設や設備」等の問題との相関 ○しかし、「公共施設」への依存や期待は大きい

(3) 鳥取県内文化施設の現状と問題点からの視点

アンケート調査とヒアリング調査結果から得られた上記のような現状や問題点を検討すると、今後の施設の利用向上やそのための「魅力づくり」への視点として以下に列挙するような問題意識が導かれる。

施設の利用向上のための「魅力づくり」への視点及び問題意識

○弾力性のある施設の管理・運営について（運営時間、料金、維持管理方法等） ○施設整備について（練習施設、専門的施設、特殊設備等） ○人材の育成や配置について（企画力、指導力の涵養） ○情報とネットワーク形成について（文化活動の基礎となる情報、文化活動を展開するための情報とネットワークシステムの必要性） ○利用しやすい雰囲気づくりについて（施設規模や形態、施設側と利用者側の交流）

3．全国的な文化活動や文化活動施設に関する動向の把握

前章でアンケート調査やヒアリング調査により、鳥取県内の文化活動や文化施設の現状等を検討し、今後、鳥取県における生活圏文化活動施設の「魅力づくり」への視点や問題点を明らかにしたが、本章では全国的な文化活動の状況やニーズ、及び文化施設に関する事例等を調査し、文化活動や文化施設に関する基礎的背景や将来の傾向を概観し、より具体的に今後の生活圏文化活動施設のあり方を考えるための参考とした。

(1) 文化活動の現状

昭和62年の総理府「文化に関する世論調査」と昭和61年の総務庁「社会生活基本調査報告」を中心に全国の文化活動の現状をみると、以下のような特徴や注目点が挙げられる。

全国の文化活動状況の特徴や注目点

ポイント	具体的数値等
○参加型の文化活動の実践者はまだまだ少ないが、潜在的な要望はある。 ○多分野で女性の文化活動比率が男性を上回っている。	実践者、希望者 男：14%、24% 女：21%、32%
○生活圏文化活動施設の代表ともいえる「公民館や地域の集会施設」の要望が高齢層ほど高く、若年層ほど低い。	20才未満：5% 40才台：13% 60才台：20%
○文化に関する行政への要望は、 「文化施設の整備・充実」が最も多いが、以下、 「文化団体・サークルの育成、援助」 「文化情報の提供」 「指導者の養成、育成」 「文化事業、文化行事の実施」 といった「ソフト」面の要望が多い。	→52%—ハード面 →27% →24% →23% →22% ソフト面

(2) 事例による文化活動施設に関する動向

全国の生活圏文化施設に関する新しい取り組み等を、新聞情報、書籍情報、通信サービス情報等を利用し、与えられた時間と手段の中で可能な限り収集し、分析した結果、次のような事例や傾向が得られた。

事例による文化活動施設に関する動向

特徴・傾向		事例
民間の取り組み動向	○企業による文化活動への支援	○「トウキョウマリンギャラリー」 ㈱東京海上火災が個人やサークルの文化活動に対して場所を無料貸与 ○「文化活動スペースの提供」 松坂屋静岡店が店舗増床計画に伴い、地域住民のためのコミュニティホールとカルチャーセンターを併設等
	○地域の団体や組合等による文化活動への支援	○「にわか美術館の」設置 愛媛県伊予市商業共同組合が空き店舗を利用して地元住民（美術愛好家、学生等）に文化活動成果の発表の場を提供

民間の取り組み動向	○既存施設のリニューアル等による個性的で専門的な文化施設の開設	○「蔵の画廊『画廊花野』」 埼玉県大宮市で農家の蔵を利用した低料金（1ケ月10万円）で雰囲気のある画廊が開設 ○教会や材木蔵を利用したイベントの開催等も
行政の取り組み動向	○管理・運営に弾力性 （法人化等による）	○「新法人で文化センターを運営」 栃木県宇都宮市の「県総合文化センター」は建設主体は栃木県で、管理運営は「新法人」を設立し、企画も含めて弾力性のある管理運営を行う
	○個性的で、特徴のある文化施設や設備の開設・・・「施設の個性化、専門化」	○「オリジナル楽器の設置と音楽祭」 栃木県栃木市では市の文化会館に「チェンバロ」を常備し、個性的な音楽祭を行う
	○練習やリハーサルを重視した文化施設の開設	○「リハーサル施設『音楽村』の計画」 東京都では、アマチュア音楽家を対象に、低料金で利用できるリハーサル施設を計画中。1998年開館予定
	○ソフト面を重視した文化施設の開設	○「複合文化施設『多摩都民フォーラム』（仮称）の計画」 東京都では1998年開館予定で、練習やリハーサルを重視し、さらに学芸員常駐と文化教室の開催、文化活動に関する相談や助言、コミュニティー新聞の発行等のソフト面を重視した文化施設を計画

(3) 全国的な文化活動や文化活動施設に関する動向から得られる参考ポイント

当章の全国的な文化活動や文化活動施設に関する動向調査より得られた、今後生活圏文化活動施設を検討していく上で参考となるポイントを整理すると、次のように表現することができよう。

今後文化活動施設を検討していく上で参考となるポイント

○ソフト面を重視した施設のあり方
○練習、リハーサルを重視した施設のあり方
○専門的、個性的施設の開設
○人を引き付ける「魅力ある施設」
○民間施設の重視

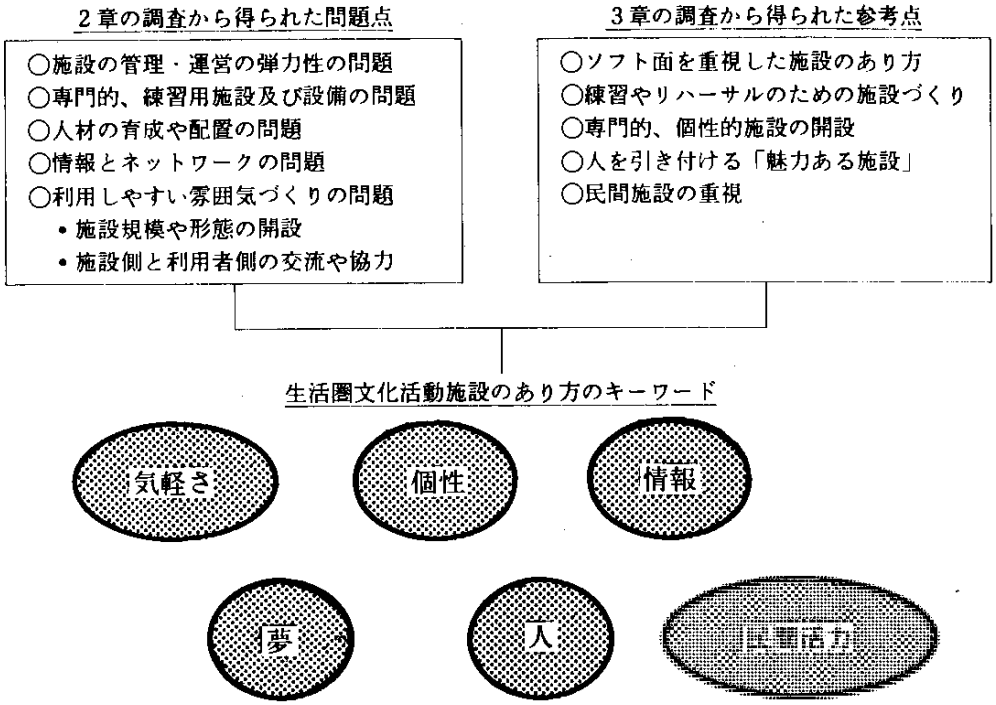
4．鳥取県における生活圏文化活動施設のあり方についての検討と提案

(1) 生活圏文化活動施設のあり方の検討視点

2章で鳥取県内の文化活動と施設の現状と問題点を把握し、また3章で全国的な事例等を調査し先進動向を把握したが、これらの調査により、今後鳥取県内の生活圏文化活動施設のあり方を考えていく上での視点（キーワード）として、「気軽さ」「夢」「個性」

「人」「情報」「民間活力」の６点を取り上げた。

図２．生活圏文化活動施設のあり方の検討フローとキーワード



(2) 生活圏文化活動施設の基本的課題と検討

生活圏文化活動施設のあり方のキーワードから、これらを関連させながらもう少し要点を整理して、「生活圏文化活動施設の基本的課題」として次に列挙する５つの柱を導いた。また、それぞれの課題を補足する意味で個別の具体的課題も検討した。

１．利活用を促進するための生活圏文化活動施設の管理運営のあり方

地域の歴史的文化環境や社会環境を踏まえた上で、可能な限り利用者サイドに立った文化施設の管理運営が必要である。

《具体的課題》

○運営時間、利用時間の延長

○文化情報の提供の工夫

○指導員、人材ボランティア等の常駐、あるいは定期的派遣システムの検討

○施設の管理運営の住民自治化や法人化

２．日常的な文化活動を通じた人材の養成・育成

文化活動の活性化のためには、日常的な文化活動において中心的役割を果たす「人材の育成」が肝要である。施設提供者は指導員や人材ボランティアといったリーダーを、住民文化活動には専門的指導者や団体の管理・運営者等のリーダーとなる人材を育成することが必要である。

《具体的課題》

○指導員・人材ボランティアの育成

○住民文化活動のリーダーの養成（交流会や研修会による技術指導、団体の管理運営ノウハウ、企画ノウハウ等の研鑽機会の積極的開催）

○官民が協力し合う文化イベントの開催により、生活圏文化活動における官民の人的協力体制を確立する

3．施設を拠点とした文化的コミュニティの形成

生活圏での文化活動を活性化するためには、まずそのための土台づくりあるいは条件作りが必要である。市町村単位までの生活圏では、すでに生活でのコミュニティはある程度確立されているが、それが文化でのコミュニティの確立に至っていないのが現状である。このため、地域の住民が抵抗や遠慮が無く文化活動に取り組めるような雰囲気づくりが必要で、そのための仕掛け作りを検討する。また、地域の文化施設を拠点とした複合的文化イベントの開催により、地域の異分野の文化活動団体が協力し合う機会を設け、地域の文化的コミュニティの拡大を目指すことが必要である。

《具体的課題》

○多分野の文化活動団体が協力し合えるような複合的文化イベントの開催

○「顕彰制度」の確立による文化活動意識の高揚

○施設設立及び管理運営において住民意見が反映できる制度の確立

○施設を拠点とした情報ネットワークのシステムづくり

4．多様な文化活動を促進するための各施設の個性化

文化活動の分野や規模は多様であり、すべての要望を満たした施設を網羅的に整備することは困難なことである。また一方で全てを最大公約数的な施設に統一してしまうことも、自由で多様な文化活動の展開にとっては逆に障害となることが懸念される。これらの命題に対応する方策として、それぞれの施設が「個性化」し、特徴をもって整備されることによって圏域として多様な文化活動ニーズに対応するような方向が必要である。

《具体的課題》

○施設の個性化（練習・リハーサル専用施設、発表専用施設等）

○設備の個性化（特殊な楽器や設備等）・・・個性的イベント開催の可能性

○民間（企業、個人、団体等）の文化施設提供に対する支援のあり方の検討

5．施設を利用しやすい雰囲気の創造

文化活動そのものが多分に感性や感情を刺激するものである以上、文化活動施設がコスト最優先で機能一点張りのものでは文化活動への参加意欲も薄れ、文化活動を活性化することにならない。人が集まってみたいと思うような「雰囲気」を文化施設が持つこと、あるいはそのための仕組みを考えることが非常に重要なことである。

《具体的課題》

○文化活動参加意欲をそそるような施設整備の検討・周辺整備をも考慮した文化性を持たせた施設整備・・・「文化らしさ」の演出・複合機能を持たせた施設整備（例：陶芸実習室と資料室等）・・・相乗効果の期待

○「夢」が抱けるような施設づくり（特に発表施設の規模や設備等）

○住民が発案し、管理運営する施設づくり・・・気軽に参加し、愛着がもてる施設に

(3) 既存の生活圏文化活動施設の利活用増進への提言

既存の文化施設の調査において、施設の稼働率が40%以下の施設が多いという結果が得られた。一方で、施設が足りないという意見も散見された。この矛盾は特定施設へ特定時間に利用が集中したり、施設や設備の内容や水準が活動者ニーズに対応しきれていないことに起因しているものと考えられる。

新たに文化施設の整備を検討する前に、既存の文化施設の利活用増進のための「魅力づくり」に言及しておくことがまず必要であると考え、大改造や大改革を伴わない範囲での提案を行った。

① ソフト面での提案

○可能な限りＴＰＯに合わせて管理運営に住民参加を図る
- 利用者が責任管理する「施設」や「部屋」や「設備」を増やす
  （利用時間の自由度を増大させ、利用者の意識も同時に変革させる）
- 管理者と利用者が「月１回」程度の割合で、共同企画や要望等についての話合いを設ける
  （住民の意思や要望の反映と参加意識の涵養）

○施設持ち回りの「出張文化教室」の積極的開催と地区放送等を駆使したＰＲ活動

○文化施設からの「情報誌」の提供
（施設の利活用状況、活動団体情報、イベント情報等）

○施設フランチャイズ制の導入
（活動団体の活動拠点づくりとそれに伴う利用料金の払込方法などの検討）

② ハード面での提案

○「１文化施設１個性化」運動の推進（個性化と魅力づくり）

○集い、憩えるスペースの確保（サロン的交流の場に）

○地区公民館等にミニ展示スペースを創設
（スポット美術コーナーやスポット資料コーナーを常設し、地区住民の文化作品や趣味の品の展示コーナーを設け、気楽に文化活動の成果を展示できるようにする）

○トイレや厨房の清浄化

○テレビ・ビデオ等のＡＶ機器の完備

○パソコン等を設置し、地区の文化施設間で通信等の簡単なネットワークを形成する

(4) モデル的な生活圏文化活動施設の提案

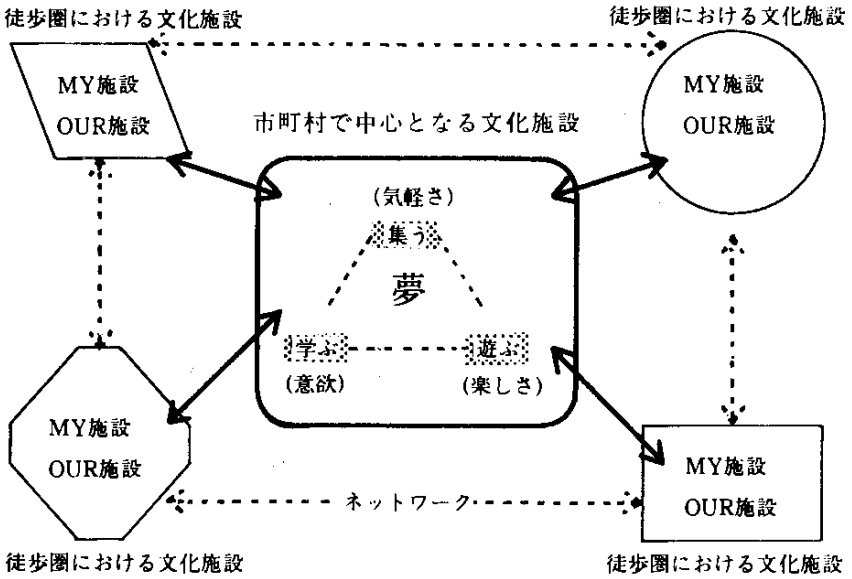
前節で、既存の生活圏文化活動施設の利活用増進のための小さな提案を行ったが、当節では、今後新しく生活圏文化活動施設を考える場合に、理想施設としてどういう施設

整備が好ましいかという点についてソフト、ハードの両面から、さらに生活圏のレベルに即して、Ⅰ．市町村で中心となる文化施設とⅡ．徒歩圏における文化施設に分けて考える。

① モデル的な生活圏文化活動施設のコンセプト

	Ⅰ．市町村で中心となる文化施設	Ⅱ．徒歩圏における文化施設
イメージ	文化活動に「夢」がもてる施設	MY施設、OUR施設
ポイント	「気軽に集える」施設 「学ぶ意欲がもてる」施設 「遊び心もあり、楽しめる」施設	「気軽に集える」施設 「愛着がもてる」施設 「憩える」施設
性　格	「練習」を中心としながらも、それなりに「発表」もできる場	基本的に「練習」の場
共通する背　景	「個性化」 「情報の収集と提供」 「ネットワーク化」 「住民意見の反映」	

図3．モデル的な生活圏文化活動施設とネットワークのイメージ



② ソフト面の提案

	Ⅰ．市町村で中心となる文化施設	Ⅱ．徒歩圏における文化施設
住民参加	○設計段階から住民意見が反映されるよう住民代表委員を含む「設立準備委員会」を設ける	左記に同じ

・人・管理運営	○「指導員」「企画員」を常駐させ、月1回程度の割合で利活用や企画、あるいは要望等についての話合いの機会を設ける	○地区住民が任意に利活用や企画、あるいは要望についての会を開催し、運営することを原則とし、行政が支援する
	○可能な限り、利用者の意見を反映した柔軟な管理・運営を図る	○施設管理上、やむを得ない施設や設備を除き、利用者の自治管理を図る
情報提供・イベント・交流・研修会等	○施設が文化情報誌を月1回程度発行し「施設の利活用状況」「文化活動団体情報」「イベント情報」の提供を行うまた、徒歩圏文化施設の情報のキーステーションとして情報の収集と提供を行う	○情報掲示板コーナーを設置し、文化情報の提供を行うまた、地区放送や口コミを重視する
	○都市部の「文化教室」を「出張文化教室」「巡回文化教室」の形で誘致する。また、著名講師の講演等も積極的に企画する	○市町村の文化活動のリーダーや施設の指導員等を講師にした定期的なミニ文化教室等を開催するシステムをつくる
	○市町村内、時には市町村を越えたイベントや発表会を開催する • 定例文化祭、発表会 • 異種の文化活動合同イベント等	○市町村内、あるいは地区内の展示会や発表会等を開催する。また、常設の「なんでも展示スペース」を設け、地元の文化活動者や趣味人に開放する
	○他の市町村との広域圏で、施設持ち回りの「文化活動シンポジウム」や「文化団体運営研修会」等開催し、人材育成や啓蒙に努める	○定期的に他地区からも指導員や活動者を招いて、「文化活動」の啓蒙や刺激を与える

③. ハード面の提案

	Ⅰ. 市町村で中心となる文化施設	Ⅱ. 徒歩圏における文化施設
建物・施設条件	**○「小さな本物」指向による施設づくり** 時には本格的な使用にも耐えられるように小規模でも防音、音響、照明等の整備は重視する （特に必要と思われる施設） ・ホール、練習室、展示室 （あれば良い施設） ・スタジオ、控室、専門施設等 （個性的・特殊な設備） ・特殊器材、楽器 ・高級楽器 ・地域特有の資料、文化品　等	**○「小さな施設で大きな個性」の施設** 練習と集会を重視し、防音対策を考える （特に必要と思われる施設） ・練習室、展示スペース （あれば良い施設） ・ミニホール （個性的・特殊な設備） ・特殊器材、楽器 ・地域特有の資料、文化品　等
基礎的施設	**○「気軽に集える」施設づくり** ・清潔なトイレや調理室 ・談話室や会議室 ・ティールーム、ロビー ・ゆとりのある駐車場 ・身障者を考慮した整備　等	**○「気軽に集える」施設づくり** ・清潔なトイレや流し、給湯室 ・無目的談話室、集会室 ・身障者を考慮した整備　等

環境整備	○「文化らしさのある」施設づくり ・植樹、花壇スペース ・周辺環境を考慮した建設場所 ・機能一点張り、経済効率最優先の建物にはしない ・地域の文化的、歴史的条件を考慮した施設整備 （既存施設のリニューアルも）	○「文化らしさのある」施設づくり ・植樹、花壇スペース ・周辺環境を考慮した建設場所 ・人を拒絶しない「暖かみ」のある内外装 ・地域の文化的、歴史的条件を考慮した施設整備 （既存施設のリニューアルも）
利便娯楽整備	○「楽しく利用できる」施設づくり ・ＡＶ機器、情報通信機器 ・図書室、資料室 ・見学できるようなスタジオ的設計	○「楽しく利用できる」施設づくり ・ＡＶ機器、情報通信機器

④　モデル的な生活圏文化活動施設における具体的機能の比重比較

②、③でモデル的な生活圏文化活動施設のソフト面とハード面の機能を列挙したが、理解を助けるために、Ⅰ．市町村で中心となる文化施設とⅡ．徒歩圏における文化施設をそれぞれの具体的項目別にその重要度を簡易比較してみた。それは以下のようである。

比較評価凡例

◎	特に重要である
○	重要である
△	あまり重要ではない

モデル的な生活圏文化活動施設における具体的機能の比重比較

テーマ	具体的機能項目		施設における重要度	
			Ⅰ．市町村で中心となる文化施設	Ⅱ．徒歩圏における文化施設
気軽さ 集い 憩い らしさ	ハード	ロビー、ティーコーナー	○	△
		自動販売機	◎	△
		談話室（無目的室）	○	◎
		駐車場	◎	△
		トイレ、厨房の清浄化	◎	◎
		ＡＶ機器	◎	◎
		スポット展示スペース	◎	◎
		植樹、花壇スペース	◎	○
		周辺環境	◎	◎
		身障者への配慮	◎	◎
	ソフト	管理運営の住民自治	○	◎
		公聴会制度	◎	◎
学ぶ 交流 情報 意欲	ハード	ホール	◎	○
		練習室、リハーサル室	◎	◎
		スタジオ	○	○
		控室	○	△

学ぶ 交流 情報 意欲	ハード	図書室、資料室	○	△
		ネットワーク通信機器	◎	◎
	ソフト	企画員、指導員	◎	△
		カルチャー教室	○	○
		文化情報誌	○	△
		マスコミ・ミニコミ利用の広報活動	○	○
		ニューメディアの利用	○	△
		顕彰制度	◎	△
		イベント・発表会	◎	○
		生活圏文化活動シンポジウム	◎	△
		文化団体管理運営研修会	◎	○
個性	ハード	専門施設	○	◎
		珍しい器材、希少な機器	○	◎
		歴史性、風土、産業等を生かした建物や施設	○	◎

⑤ 施設の有機的な活用に向けて

以上提案してきたモデル的な生活圏文化活動施設も、それぞれの施設が単独で機能するだけでは、既存の文化施設とも関連させた有機的で相乗的な利活用という観点からすると不十分であるといえる。

既存の文化施設、新しく建設される文化施設が有効に利用され、文化活動が活性化されるためには、広域的な観点から「施設のネットワーク化」とそれらを統括し、情報の収集・管理・提供の中枢となる「文化情報センター」的施設が必要であると考える。「文化情報センター」を核としながら、文化施設のネットワーク化を図っていくためには、次のようなポイントが具体的課題として挙げられる。

文化施設のネットワーク化を図るための課題

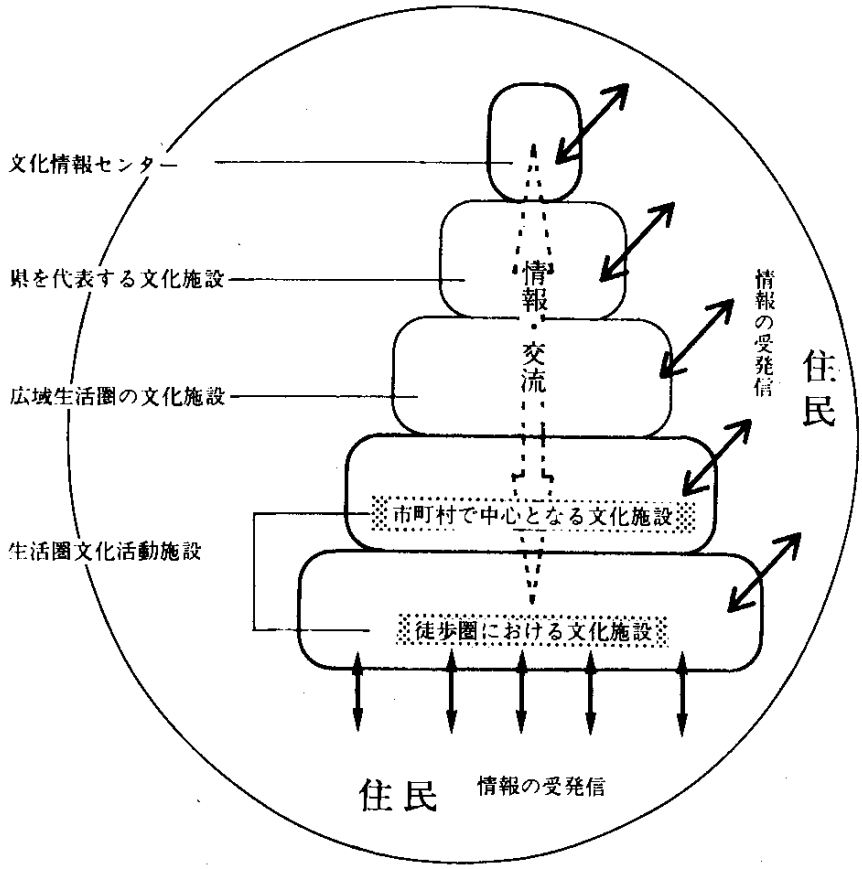
○文化施設間での「人」と「人」との交流やイベント等を通した交流によるネットワーク形成

○「文化情報センター」－「県を代表する文化施設」－「広域生活圏の文化施設」－「市町村で中心となる文化施設」－「徒歩圏における文化施設」と通信網で結び、「文化関連情報通信システム」を整備する。

○文化施設管理者の「定期情報連絡会」を月1回程度の割合で開催し、中心施設から市町村単位での施設、あるいは民間施設をも取り込んで情報交換を行う

○以上の方法等により収集された「情報」を各施設で住民に提供できる手段を持つこと（情報誌、マスコミ、ミニコミ、情報広場、口コミ、掲示板、地区放送等）

図4．文化施設のネットワーク化のイメージ



おわりに

現在、わが国は「高齢化の進行」「働きすぎによる国際摩擦」「都市における疎外感」等といった「社会の発展や動向」と「人の意識や行動」とに微妙なズレが生じるという複雑な問題が顕著化してきつつあるが、これらの問題の多くは、これまで我々が「経済効率」や「機能最優先」といった「経済性最優先」を進歩の至上テーマととらえ、「人の感性や感情」あるいは「ゆとりや余裕」といった「非経済」といわれる部分を極力排除して進んできたことに起因しているものと考えられる。

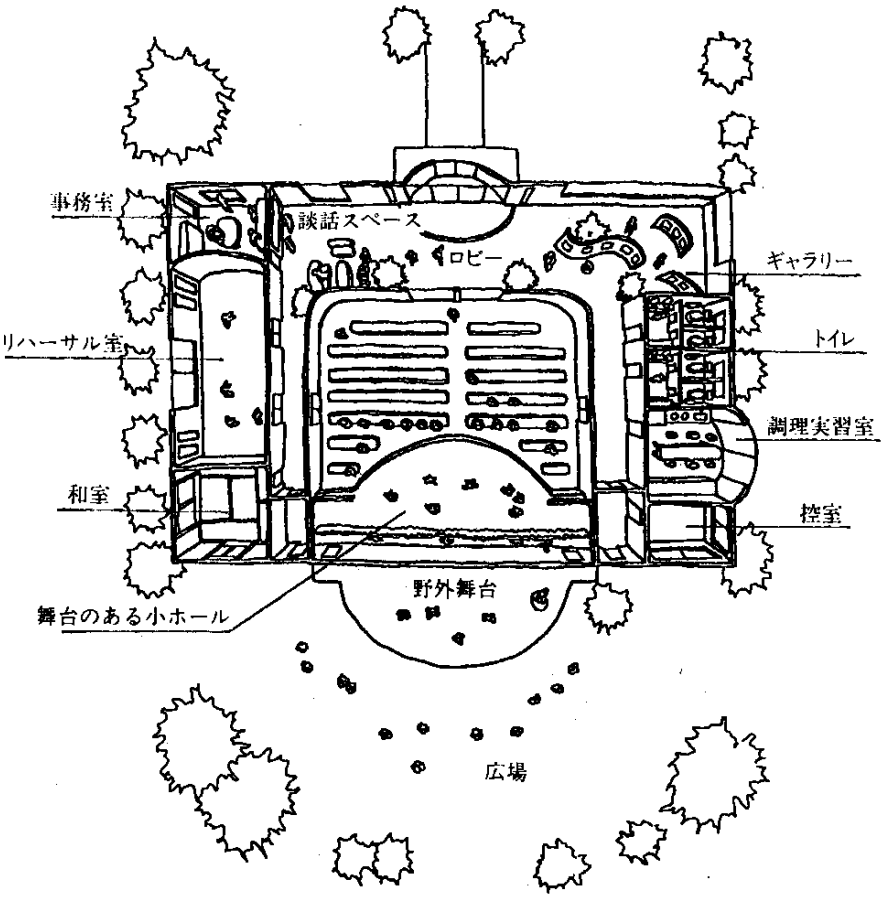
これからは進歩や発展の価値観の一部分に、もう少し「非経済」の部分（文化等）を取り入れ、ゆとりをもちながら、「人とのふれあい」とか「感性の涵養」といったものを大事にしていくことが必要であると考える。社会における様々な営みは、最終的には人と人とのかかわりあいであり、「非経済」の部分（文化等）をもう少し見直すことが、社会の潤滑油を増やすことになり、結果として、経済活動にも好影響を与えていくもの

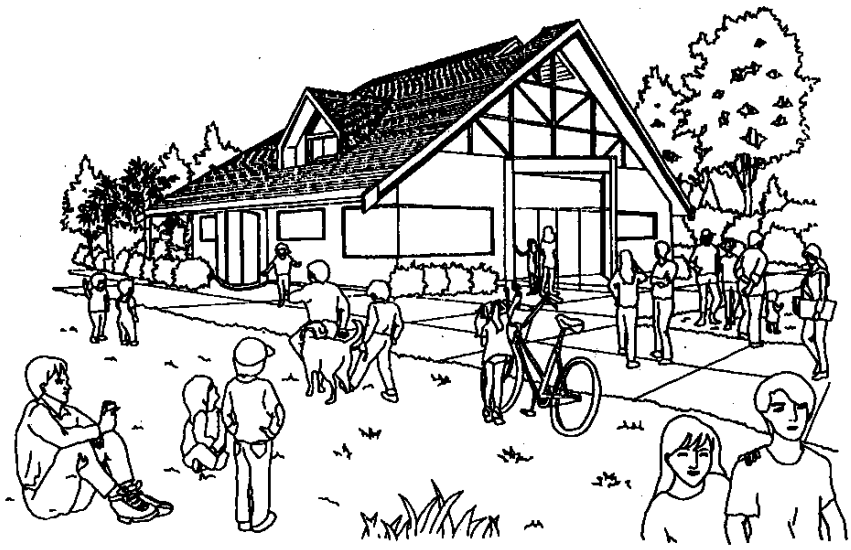
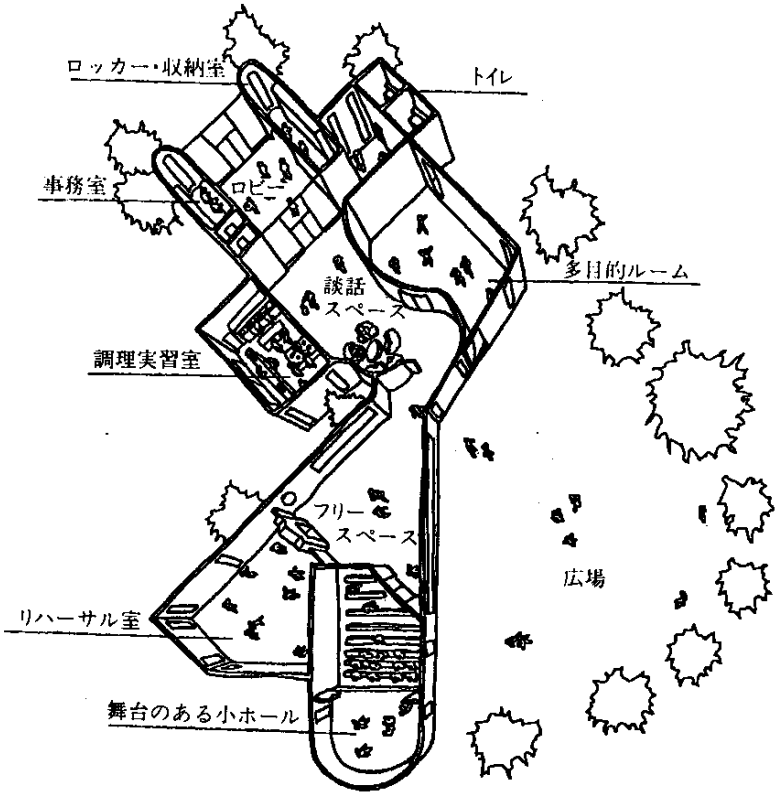
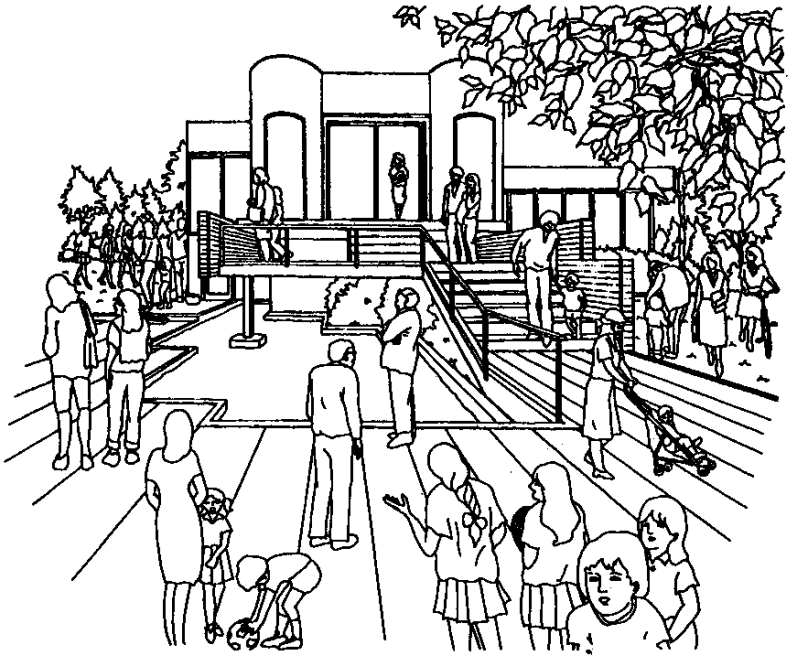
と推察される。

本報告は、そういう営みの基盤的拠点である「生活圏文化活動施設」のあり方を研究のテーマとして取り上げ、その必要性の確認と整備の方向の一案を提案したものである。今後「生活圏文化活動施設」がソフト面、ハード面ともにさらに充実し、「都市、あるいは社会生活におけるオアシス」となるよう期待したい。

最後に、蛇足ながら、モデル的な「徒歩圏における文化活動施設」のイメージ図を2案ほど付加し、本報告の結びとする。

モデル的な文化活動施設のイメージ１





モデル的な文化活動施設のイメージ2